

## 『分子標的治療薬とB型肝炎再活性化と薬剤師』

肝臓川柳

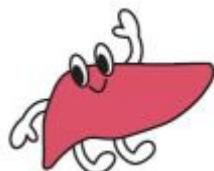


『再活性 個々を標的 チェックする』

(再活性予防で個々の標的薬の危険性をチェックしています)

.....ノノノノノ

癌に対する治療薬は、  
癌細胞の分裂、増加を抑える殺細胞性といわれる抗癌剤と、  
癌の成長過程に必要なある部位（分子）を阻害し癌の増殖を抑える分子標的治療薬があります。  
癌の治療により免疫が抑えられるとB型肝炎ウイルスが増えて  
活性化する（B型肝炎再活性化）ことが重大な問題であり、  
殺細胞性抗癌剤使用時はB型肝炎再活性化予防の対象となりますが、  
分子標的剤はその作用機序により異なります。  
すなわち、癌増殖のシグナル伝達を阻害するのみで免疫に関与しない薬は危険性がありませんが、  
免疫に作用する機序をもつ薬は危険性があると判断しています。  
当院は3年前よりB型肝炎再活性化予防システムを運用し、  
再活性化の危険性のある抗癌剤使用時には自動的にチェックするようになっていますが、  
分子標的薬に関しては一つ一つ薬剤師が危険性を調べて対象にするかどうか決めていきます。  
最近多種類の分子標的薬が次々に出現しており、  
ますます薬剤師の関わりがきわめて重要になっています。



これだけ覚えておけば損はない！

今 回 の ポ イ ン ト

癌に対する治療薬を使用する際にはB型肝炎再活性化が重大な問題となる場合がある。  
分子標的薬を使用する際には個々により危険性が判断される。  
B型肝炎再活性化予防システムの運用により事前チェックを実施しているが分子標的薬も  
次々に出現している中、その危険性を個々に調べていく事も非常に重要になってきている。

(文：福井県肝疾患診療連携拠点病院運営委員会 野ツ俣 和夫)